

# 第6回 兵隊屋敷の今昔

皆様いかがお過ごしでしょうか？前回は書きたいことを書き続けたらまさかの10ページに渡る長文（しかも前置きが8割）になってしまいました。帝国陸軍の解説をちゃんとやったら本が一冊できるくらいになりそうですので、本コーナーでは**簡単な解説**に留めたいと思います。

今回は反省して割とライト※な部分にスポットを当てていきたいと思います。（※当社比）

（今回からスマートフォン需要に合わせるべく縦画面構成になりました）

さて、今回のタイトルにある「兵隊屋敷」という言葉ですが、これは兵舎を指す俗語です。当時の人々からすると兵営は造りがしっかりした洋風建築（白壁兵舎の場合は和洋折衷ですが）でしたので、「お屋敷」に見えることからできた言葉であろうと思います。



↑白壁兵舎の構造がわかる模型です。実はこの兵舎の移築に際し、建物の設計図が現存していないことが問題になりました。そのため、新たに図面を書き起こしながら解体したので大変時間がかかりました。こちらの模型は新潟職業能力開発短期大学の学生2名が卒業制作として制作したもので、9か月かけて完成した大作です。  
柱の骨組みまで精巧に再現されていますので、来館の際は是非ご覧ください。

時代は流れ陸軍兵営は自衛隊駐屯地となり、「兵舎」は「隊舎」になりました。今では「兵隊屋敷」と呼ぶ者はいませんが、自衛官として勤務しているとそこかしこで昔の「名残」を感じるがあります。今回はその「名残」をいくつかご紹介します。

今回は「言葉」をメインテーマとしたいと思います。

自衛隊は言葉遣いが独特です。いわゆる「自衛隊用語」とも言うべき様々な号令や用語があります。その中で自衛官が普段何気なく使っている言葉が、実はかなり古くからある言葉だったりします。

## 1 事故（じこ）

いきなり不吉なワードを持ってきたと思われそうですが、別に悪い意味ではありません。言葉の本来の意味を辿ると「何か理由があって」ということです。自衛隊では点呼（てんこ）において報告に使われる言葉です。点呼とは、部隊の人員が全員いるか、異状が無いかを確かめるためのもので、基本的に朝と夜に整列して行われます（日朝（にっちょう）点呼、日夕（にっせき）点呼と言います）。この際、次の例の様に報告します。

（例）「第1班、総員6名、**事故1名**、現在員5名！」

この場合、「第1班は全員で6名ですが、1名が（何かの理由で）この場にはいないので今は5名です」ということになります。この理由は訓練であったり休暇であったり様々なので、この後に「事故の1名は〇〇、休暇！」みたいに内訳を報告することになります。つまるところ事故とは「その場にはいない人」ということですので決して「事故（アクシデント）に遭った人」ではありません。ご安心ください。筆者は幸い本当に事故で事故になった人（ややこしい）は見たことがありません。今後もそうでありたいですね。

若干脱線しましたが、この点呼の報告要領は陸軍の頃からほとんど変わっていません。やってみるとわかりますが簡潔明瞭かつ素早く報告できますので、是非一度試してみてください（どこで？）。

## 2 上番・下番（じょうばん・かばん）

こちらは一般的に使われない言葉ですね。意味は何かの当番や勤務に就くときを「上番する」、交代してその勤務を降りることを「下番する」と言います。駐屯地で代表的なものは当直勤務や警衛勤務（駐屯地の警備）で使われる言葉ですが、使い勝手がよいのであらゆる勤務等で用いられます。

こちらはかなり古い言葉で、元々陸軍では当直勤務のことを「週番（しゅうばん）」と呼び、一週間単位で交代していたことに由来します。歩兵連隊ならば週番司令（将校）、週番下士（下士官）、週番上等兵という並びで各部隊、各階級に当直を置いていました。これらの「番」を交代するときに使われていた言葉だったわけですね。

上番はともかく、下番は知らない人が聞くと間違いなく「鞆」と聞き間違えられること請け合いです。これがすんなり通じる人は間違いなく自衛官か自衛隊経験者であると思っています。



↑史料館展示より。中央に立っているのが週番将校です（右端に週番下士）。各班を回って報告を受けているところです。

### 3 飯缶（飯罐とも）（ばっかん）

こちら聞き慣れない言葉ですね。字面からすると「めしかん」と読みたくなりますが、「ばっかん」です。これは食事を運ぶための金属製の容器のことで、わかりやすく言えば小学校とかの給食を運ぶアレと置いていただければと思います。

これは陸・海・空を問わず使われている言葉で、語源ははっきりしませんが、昭和以前の言葉であることは間違いのないようです。ちなみにご飯のことは「めし」と呼ぶことが普通で、食事を運んでくることを「めし上（あ）げ」、片付けて下げることを「めし下（さ）げ」と言います。こちら陸軍時代から使われている言葉です。

現在の自衛隊では食堂があるので演習等、野外で食事するときには使う程度ですが、昔は兵舎で食事していたので毎回炊事場から飯缶で「めし上げ」し、食べ終わったら「めし下げ」で飯缶を洗って返納します。



↑炊事場の写真。中央の人が手に持っているのが飯缶です。左下には「めし上げ」の様子も。

## (脱線) 陸軍の食事情

軍隊の食事と言うと、缶詰や乾パンみたいな保存食ばかりみたいなイメージが付きやすいですが、平時ではちゃんと料理されたものを食べています。むしろ兵士は体を鍛えないといけないので、栄養バランスなどかなり真剣に考えられていました。「**軍隊調理法**」なる本もあります。どんな本なのかと言うと、一言でいえば「**写真が一切ないクックブック**」でしょうか。レシピとしては調理法や分量、熱量（カロリー）等、かなり詳細に書かれています。和食だけでなく洋食や中華料理もありました。

食事の量ですが、1人1日あたり**米4合と麦2合**、副食（おかず）となっています。まず**米（麦）の量**でびっくりします。ちなみに軍隊では基本的に麦飯が出されていました。これは脚気（かっけ）の予防のために、日露戦争の際に大量の脚気患者が出てしまったことを教訓としています。この麦飯、経験者の方は口を揃えて「（白米と比べると）黒い」と表現しますが、食べてみるとなかなか美味しかったそうで。確かに、麦ごはんは今も好む人は多いですね。

現在の自衛隊のご飯も麦（強化精麦）が入っています。脚気の予防のためなのかはわかりませんが、これも「名残」なのかも知れませんね。



食事風景(昭和11年)

## (おまけ) 星の数・飯の数

言葉だけ聞いても「？」となりますが、星の数とは階級のこと（階級章が星と線で表すことから）で、飯の数は勤続年数を指す俗語です。なんでご飯が勤続年数なのかと言うと、「食べたご飯の数＝日数」だからだとか。軍隊は階級社会ですので兎にも角にも星の数が第一なのですが、長く勤務している人もまた強い（何が？）ということですね。ちなみに明治の頃はご飯の容器が竹製の「メンコ」と呼ばれるものだったので「メンコの数」と呼んだそうです。（その名残か軍隊の食事を「メンコ飯」とも呼びます）さすがに現在「メンコ飯」という言葉を使う人はいませんが（少なくとも筆者の周囲には）、飯の数という言葉は今でも聞きます。ある意味、明治から続く言葉であるとも言えますね。



↑ 明治の話が出たので史料館でも希少な明治時代の写真を一つ。明治42年に撮影された下士（官）候補者の記念写真です。関係ない話ですが欠席者（？）の貼り方は昔からこうだったんですね。

いかがでしたでしょうか？今回は現在の自衛隊のことも織り交ぜて紹介してみました。時代はどんどん進みますが、今でも変わらず残り続けているものがこの自衛隊にも沢山あります。史料館は2階が歴史（陸軍）、1階が自衛隊のコーナーになっています。両方を見てその違いや共通点を見つけてみることも面白いと思います。（了）